

田淵 潔元教授に聞く

同志社スポーツと

大学体育

— その始動期の回顧 —

聞き手

河野 仁 昭

学生時代のスポーツ

— 先生の学生時代は何年頃ですか。

田淵 予科が大学の終り、大学本科が昭和の初めです。

— その頃からスポーツをやっておられたんでしょう。

田淵 やっていましたが、陸上競技をね。同じクラスにいた陸上部員の二、三人の友人に誘われて、何となく入部した様なもので。

— 種目は何ですか。

田淵 主にハードル、それも対校試合要員程度だね。

— クラブに入って?

田淵 クラブのようなものがあることはありましたが、今の体育会のクラブとちがって、スポーツをやる学生とそれ以外の学生とは、はっきり分れていなかったのです。

大学の予科はクラス制でして、私たちの年度はAからEまで五クラスあって、E組はフランス語、他はドイツ語でした。授業は午後二時半に終るのです、どのクラスもね。それから、西門を出たところに「ユニオン」という喫茶店がありました、そこへ集まるわ

けですよ。そしてちょっとお茶を飲んだりしゃべったりしてから、練習に行くのです。

— 練習場はどこですか。

田淵 はじめの頃は主に、今の中学校のグラウンドでした。テニス・コートは啓明館の東側、今の光塩館の位置にありました。その東側は土堀で、ここから東は男子禁制。ぼくらは「デントン堀」と呼んでいました。

中学校のグラウンドの北端、今の工芸部の博覧館あたりに剣道、柔道の道場や土俵があり、それに並んで部室のようなものがありました。大体みなあのグラウンドで練習をしたのです、ラグビーなども。水泳部は疏水のダムで、馬術部は深草の騎兵連隊の馬場に行ったりしていました。

— 狭かったですか。

田淵 狭かったです、お互いに譲りあいましてね。第三高等学校や早稲田、慶応とのラグビー公式対抗試合もグラウンドでやったんですよ。

— 野球もですか。

田淵 そうです。平常は二時半に授業が終ると、選手はそこで練習をやる。一般学生はすぐに下宿などへ帰らないで、それを見に来



田淵 潔氏

ましたり、興味のある種目に交って練習をやったり、選手と一般学生の区別はあまりなかったのです。選手もまた、一つの部に固定するというのではなくて、夏に陸上競技をやっている、秋にはラグビーをやるとか。芦屋市長をやった猿丸(吉左衛門)氏がよい例で、彼はわたしの二級上でしたが、相撲も、同志社が生んだ初代の学生横綱、柔道も高段者、陸上では砲丸投、ハンマー投の日本記録をつくった万能選手でしたね。同志社の猿丸といえど、京都では知らない人はいない位でした。中学生も上級生になると、大学と一緒にやる者がいました。全同志社チームということで、中学生が一緒に認められていたのです。

——クラス対抗試合というのがあったとき

田淵 そう、そう。学年対抗、学部対抗とか、そういう形式が多かった。クラス対抗など、クラス全員が応援するわけで、全員参加という感じでしたね、大変な盛り上がりようでした。それから、瀬田川でやる春のボート・レース。これには女専(女子大)も、女学校(女子中高)も、中学校も、その日は授業が休みになって全員応援に来るのです。グラウンドでやる秋の運動会もそうでした、幼稚園から下宿のおばさん、娘さんまで押しかけて特に仮装行列が人氣の中心でなかなか盛大でした。

——ボート・レースは、関西では同志社が草分けだときいていますが、先生の学生時代にも人氣があったわけですね。

田淵 ありました。全学あけての行事でした。

——先ほど、中学生も同じチームでやったというお話がありました、対外試合でもかまわないんですか。

田淵 問題はなかったのです。大正十年頃から、たとえば陸上なら関西学生陸上競技連盟とか、そういった組織がつくられるようになりましたが、大体は新聞社主催の大会など

が多くて、個人参加で、出場資格もあまり細かい規定はなかったのです。

東京での大会などへも、個人参加のかたちでどんどん行きましたよ。

——同志社の学生が？

田淵 同志社ですが、関西の選手が。当時は関西のレベルは高くて、東京の大会で対等に競技ができたのです。

——同志社からも、オリンピック選手が出ますね。

田淵 そう。西(貞一)君ね。彼が同志社からロスアンゼルス・オリンピックへ出た最初の選手で、わたしが大学本科のとき入学してきたのです。いま東京で運動具店を経営しています。

——種目は何だったんですか。

田淵 二百メートル(元日本記録保持者)と四百メートルでした。その頃は、いまのアジア大会の前身である極東大会というのがあって、東京、上海、フィリピンで交互にやっていたんですが、この大会には同志社からも選手がたくさん行きました。どんな試合でも、出場選手は有終館の階段へ並びましてね、全学の者がその前の広場へ集まって、激励会を

やったものです。

——とにかく、クラス全員参加、選手と一般学生の区別がない、というのはいいですね。

田淵 現在とはちがいました。

——授業が二時半で終る、その後はスポーツ。そういうことで、授業とスポーツが両立できたというのもいいですね。

田淵 わたしらの学生時代にグラウンドが狭くなってきたものだから、陸上の連中は植物園のグラウンドで練習をやるようになりましてね、授業が終るとハードルやハンマーをかついで、加茂川の堤を歩いて植物園へ行きました。

——毎日ですか。

田淵 ええ、ほとんど毎日。当時、同志社の近くを走る電車というのは、いまのインクラインが発発で、そこから仁王門、寺町二条、それから寺町通りを北へ上って今出川通りへ出て、出町の柵形で折返しでした。寺町通りがメイン・ストリートでした。河原町通りなどなかったのです。小さいチンチン電車が家並すれすれに走ってました。

わたしなど、その電車に乗って通学するこ

とはなかったし、植物園のグラウンドで練習した後も、歩いて寺町通りを下り、新京極を抜けて四条通りへ出て、そこで解散したものです。わたしたちに限らず、乗り物に乗るような学生はあまりいなかった。岩倉あたりからは当然のこと、寒稽古のときなど、嵐山からでも歩いてくる者がいました。

学生生活の思い出

——先生は、ご出身はどこですか。

田淵 本籍は倉敷ですが、生まれたのは神戸です。わたしのおじが同志社に入学していたのですが、卒業前に死にましてね、それで親父が「お前、同志社へ行け」というものだから、わたしは商船学校か海軍士官学校へ行きたかったのですが、それらの学校は中学五年からでないかと受験できなかった。同志社は四年から受けられたので、四年修了で同志社へ入ってきたのです。

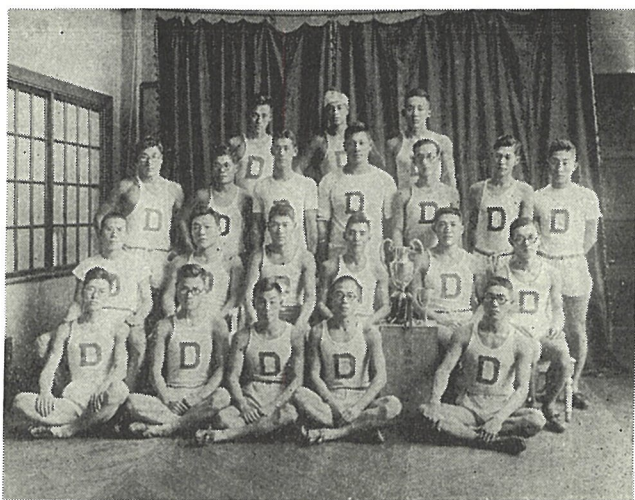
入学してみるとけっこう楽しい学校だったし、いい友達にも恵まれたものだから、そのまま同志社を卒業したわけです。いまの学生は卒業してから同志社のよさがわかると申しませんが、わたしなどは在学中によさが感じら

れた。(笑)とにかくあのクラス制度はいいですよ。学生数、教室数、教員数などの関係もありますが、もう一度やってほしいですね。本科に進んでも、皆顔見知りで、同期の桜といったかたちでしょう。私たちの同期は、上野総長、田辺哲崖、猿丸元など、今でも毎年リユオンの後、同期会をやっています。卒業後五十年以上、だんだん数が減るのは淋しいことですが、毎年二十名は集まります。

予科の授業というのは、歴史とか地理にいたるまで、テキストはほとんどみな英文の原書を使うんですよ。やっぱり同志社はちがう(笑)、そう思いました。竹林熊彦、わたしたち「チクリン、チクリン」と言いましたが、その先生からは歴史を習いました。英書の下調べには苦労させられました。

——竹林先生は、歴史が専門ですか。

田淵 専門ではなかったのですが、英書でね。それから山本宣治、生物のね。この先生は教室で性教育をやるんですよ、いろいろな写真を教室で配りましてね、学生から性体験のアンケートを集めたり、キンゼー以前に山宣さんがやってあった。その時間は教室



大正12年同志社大学陸上競技部
関西学生陸上競技選手権大会優勝記念写真、前から3列目、向って右端
が田淵潔氏、同列右から4人目が猿丸吉左衛門氏。

が満員でしたわ。(笑)

——面白い授業ですか。

田淵 面白いというより有益だったと思います。キリスト教主義の学校にふさわしくないということの問題になったそうですが。

その他に、社会党の代議士になった河野

ですね。

——当時の教室は？

田淵 英文科の教室は東寮でした。予科は弘風館、法学部は致遠館と有終館の一部を使っていた。今の総長の上野直蔵さんが、わたしと予科からずっと一緒でしてね、紺紺

密、法政大学の総長になった谷川徹三、それから演劇の山本修二、そういった先生に習いました。当時は他に、中島重先生など、立派な先生が多かったです。

——先生は英文科ですか、法学部の先生方とはあまり関係がなかったわけですね。

田淵 しかし、予科で一般教養として習うわけです。そうそう、マルクスを翻訳した長谷部文雄、あの先生が陸上競技部の部長でした。

——河野密はバスケット・ボール部の部長、住谷悦治先生はラクビー部長だったよう

に袴をはいて、朴園の下駄をはいて、たしか丸太町辺に住んでおられたと思いますが、毎朝御所を歩いて通っていました。非常によく出来る人でした。

——先生が大学を卒業されたとき、総長は大工原(銀太郎)先生ですか。

田淵 中村栄助さんでした。総長代理だったのです。入学したときは海老名弾正総長でしたが、わたしが卒業する前に辞任されましたね。

卒業後の仕事

田淵 わたしが卒業したのは、昭和四年で、世界的な不況のときでしてね、就職はむずかしかった。わたしはアメリカ資本のゼネラル・モーターズという会社へ入りました、もう少し英語をやったかったものだから。その会社では日本語は一切使えないのです。だから会話ができるようになるまでは、新入社員は一部屋に入れられて、メール・ボーイ程度の仕事しかやらせてもらえなかった。

——大学を卒業していてもですか。

田淵 そうです。外語専門学校とか、早稲田大学の卒業生もみな、一つの部屋ではさー

っとしていたわけですよ。わたしは偶然のことで会計課の仕事を手伝って、それからオフィスへ出て仕事をしようになりました。スポーツをやっている根性があったせいか、仕事の能率がありましてね、当時は週給でしたが、マネージャーが給料を上げてくれたりしたので、能率主義でしたからね。

ところがその会社も不況で、独身の男と、結婚している女は自宅待機、今というレイオフということになったのです。

京都へ帰ってばんやりしておりましたら、毎日新聞社の運動部長が、神戸の「又新日報」へ行ってみないかと紹介してくれました、昭和六年四月から又新日報社へ入ったんですが、これも不況で、ストライキですわ。

ストで仕事もない。そんなとき神戸に市民運動場ができてましてね、四百メートルのトラック、五十メートルのプール、飛び込みプール、野球場、テニス・コート、そういった設備がありましてね、当時としては立派な総合運動場でした。

「又新日報」の記者をしていたので、神戸市長などよく会う機会も多かったものですが、「市役所へ入らんか」といわれましてね、

昭和七年四月に神戸市役所へ入ったのです。

——運動場のお仕事で。

田淵 そうです。五年ほどスポーツ界で過して、それから教育部社会教育課へまわされて、市民体育関係の仕事をしました。そのうち戦争がだんだん激しくなると、そういう仕事ができなくなってからは、厚生局の仕事とか防衛課長などをやりました。

戦争が終って、教育局に保健体育課というのができて、わたしはその初代課長をやりました。それから教育委員会の体育保健課長になりまして、学校保健、学校体育、学校給食、市民体育、そういった仕事をやっていたのです。

同志社大学への転職

——それで、同志社大学の体育教育をやってくれんか、ということになったわけですね。

田淵 まあ、そういうことなんです。昭和二十五年に、新制大学の保健体育が正課の授業になって、当初は、私と一緒に陸上競技部にいた、有名な選手であった塚本簫之助君が、教授として中心になってやっていたので

す、わたしの一年後輩でした。

——塚本義夫先生と関係のある方ですか。

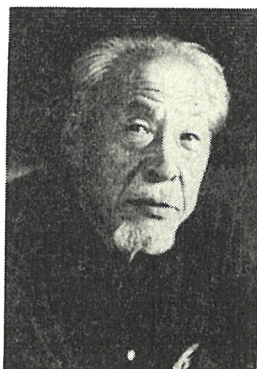
田淵 たしか従兄のはずです。ところが、昭和二十五年七月に塚本簫之助君が病気で倒れ、十月に亡くなられたのです、惜しい男をなくしたものです。それで最初、塚本義夫君が神戸のぼくとこへ来ましてね、同志社へ来てくれということです。予科長だった児玉実用さんもわざわざ神戸にきてくれました。上野直蔵さんとも会いました。芦屋市長の猿丸さんも来られて、「俺について来い」(笑)、そんな調子で当時の大塚節治総長に紹介されましたね。わたしはまだ市役所に末練もあつたものだから、「困ります」と何度もいったんだが、最後はもういやおうなしだ。

(笑)当時、同志社出身者で体育関係の仕事をしていたのは私ぐらいのもので、白羽の矢がたつたんだと思いますが、今にして思えば有難い転身だったと感謝しています。

新制大学発足当初の体育教育

——先生が同志社へ帰られたころは、体育にはどんな先生がおられたんですか。

田淵 さっきの塚本、瀬口両君ですね、二



故猿丸吉左衛門氏

人が講師でした。それから助教授に山下好子、陸上でね。他に事務の吉田敏子さん、結婚して内海さんになった、この子も陸上をやっていました。それから柳沢というおじいさんと、塩谷真太郎という人——。助教授一、講師二、事務員三人、そういう状態でした。現在では専任教員十二名、嘱託講師三十五名、事務職員七名と充実し、他大学に負けぬ実績をあげています。

——わたしなど、新制大学で体育が正課になった詳しい理由を知らないんですが、予科には体操がありました、大学の本科にはなかったでしょう。

田淵 本科には軍事教練しかなかった。一九四九年にアメリカの教育視察団が来まして、次のような勧告をわが国の文部省にした

わけですよ。その内容はね。

「小学校、中学校、実業学校、専門学校には体育の時間は十分にあるが、身体的なレクリエーションもあまりなくて、長時間勉強しがちな大学でも同じような措置がとられるべきである。健康教育（この健康教育というのは、日本では保健のことです）と体育は、教育計画全体の基礎となるものである。身体検査、栄養、公衆衛生の授業や、身体と体育の教育を大学程度の課程にまで及ぼし、またできるだけ早く諸設備を改善することを勧告する。」

まあ、こういった趣旨の勧告です。それで文部省では学校体育研究委員会というものを設けて検討した結果、新制大学に於ては大学体育を確立し、全学生に体育の機会を均等に与えること、健康やスポーツ、公衆衛生などについて正しい知識を与えること、そういったことで、正課体育をとり入れることになったわけです。大学基準協会が最初に出しました基準は、学士号をとるには大学四年間に最低一二〇単位を修得する、というものでしたが、それに体育が加わって、講義二単位、実技二単位、合計四単位を必修にするというこ

とになったのです。

人間というのは大体、二十歳ぐらいまでが発育発達の段階ですから、体育は非常に必要なんです、この年齢層の学生たちは元気ですから、その必要をあまり感じない。中学にも高校にも体育はある、大学まできてなんで同じことをやらんならんのか、というわけですね。一般教育科目についてもそうで、科目の名前が高校と同じものだから、そう思うわけです。

大学の先生方の中にも、どちらかというと若い先生方の中に、体育の必要を感じない方、スポーツをやったことのない方が多かったですよ。

——大学としても教員を確保しなきゃならんし、設備は必要だし。

田淵 わたしが同志社へ来たころには、「千人ぐらい集めて、一緒に体操やしたらええじゃないか」というような意見がありました。「二時間も体操ばかりやれるものじゃない」というのですけどね。それに、学生のなかには、徹夜でマージャンをしたのや、朝飯を食わずに来るのがあるので、眼の色や顔色、体の動き、そういう身体状況を見ながら

やらせないことには事故が起りかねない。それを防ぐためには、一クラスの人員に限度があるわけですよ、眼が届かないから。

教員スタッフ

——体操ばかりでは駄目だとなると、いろんな種目を設けないといけませんね。

田淵 種目を設けるには、指導できる先生がいるでしょう、最初はそれで苦労しました。当初は塚本君がバスケット、瀬口君が野球、山下好子さんが陸上、そんなものでした。

——先生は？

田淵 わたしは講義、体育理論ですね。三千人の学生にわたし一人です。仕方がないので、二百五十人のクラスを六クラスつくって、その千五百人を前期に終える。後期には別の六クラスをやる、そういう状態でした。

——同志社へ来て下さいと言われたはずですね。(笑)

田淵 えらいことでしたわ。そのほか実技ももたされて。お蔭で四年たつと全学生が私の講義を聞いてくれたことになったわけですね。保健理論は二回生、厚生館に安藤唯一と

いう医者がおられて、その方と、室町の豊田順爾という開業医さん、そのお二人にもってもらいました。医学部のある大学は、その点は楽だったのです。

——新しい先生を採用されるのも大変だったんじゃないですか。

田淵 教授の資格も、体育と芸術の分野は「特殊な技能を有すること」となっていて、他の分野の教授とちがう面があるのです。たとえば音楽の教授では実際にピアノが弾ける実技の先生と、ピアノはうまくなくても音楽史とか音響学といった音楽の理論を教える人とは、本来別の人がやることなんです。体育も理論と実技はアメリカでは別の人がやるんです。実技はコーチで、アメリカン・フットボールのコーチなど、総長よりも収入がよい例がある。日本ではそれが一緒になっていましたね。

卒業して間もない人を非常勤できてもらって、三年か四年実技を指導してもらって、業績をみてそういう人を採用するのです。学位があっても実技の経験がない人は指導ができませんから、誰でもよいというわけにはいきません。そして実技の指導をやりながら理論

も勉強してもらうのです。現在では、東大や筑波大学とか、その他で修士をとった人がたくさんでるようになりましたから、修士でないと採用資格がないという意見が強くなってきましたが、同志社の場合はいままでのところ、いい、わるいは別として体育教員は全部、同志社スポーツOBで固めており、非常勤の期間を大学院での修業期間にかえてもらうといった措置をとってきましたけれども、だんだんむずかしくなりつつあります。

施設・設備

——教員スタッフの他に、体育施設・設備の問題がごさいますね。

田淵 これがまた一苦勞。(笑) さいわいわたしの学生時代の先輩、同僚、後輩が大学の教員になったり役職についていましたから、そのつながりでわりあい無理がいえたのです。亡くなられた秦孝治郎理事長、あの方には随分ご厄介になりましたよ。秦さんはわたしの顔を見ると「田淵さん、また金か」(笑)、よくそういわれたものです。

——昔のように、中学校のグラウンドで間にあわせるわけにいきませんしね。

田淵 もともと中学校のグラウンドで主にやっておったんですけれども、中学生と大学生が一緒にやっておっては危いという意見もあり、学生生徒数もふえましたからねえ。中学校の体育館なども、中学のあいているときは使わせてもらっていたんですが。

——御所があったからよかったですね。

田淵 御所がなかったら、とてもさばきません。それから岩倉校地ですね。あの土地を昭和のはじめに同志社が買って高等商業学校がその一部を使っておった。ところが終戦後に、あの土地を返せという要求が地元で起ったんですよ。同志社が空地にして放っておいたものだから。そんなことから、岩倉駅の近くを公立中学校を建てるために二百万円かいくらかで手放すことになったんですよ。

それ以後、秦理事長がぼくを呼んで「田淵さん、岩倉の土地をあまり金をかけずに利用する方法を考えてくれんか」というんですよ。地元には土地を返せという要求がありましたから、放っておくわけにいかんです。その頃、あそこの空地を使っていたのは、軟式野球と馬術部だけでした。

——二つの部だけですか。

田淵 そうでした。現在大学が使っている野球場は高校のもので、午前中だけ大学の軟式と硬式の野球に使えた。昭和三十年になってようやく、陸上競技場、テニス・コート、野球場などをつくったのです。野球場は大学がつくったのと高校のを交換したわけです。それからラグビー場、あれはもともと高校のもので、大学が補修とか土入れをやるという条件でした。

——総合施設ができ上ったわけですね。しかし、正課体育で使うにはちょっと遠いじゃないですか。

田淵 問題はその点なんです、学生の輸送をどうするか。大学の体育に使うんだということで、何度も理事会を開いて作った施設なんですがねえ。体育会の連中にしても、午後からあそこで練習をするとなれば、下級生は朝から行ってラインを引いたり、いろいろ準備をしなきゃならんから、午前中の授業にも出られないということになる。

大下角一学長のときでしたが、体育会のOB半分がもつから後半分は大学が金を出して合宿所をつくってくれとか、施設をつくって欲しいとか言い出したのです。大学長はわた

しを呼んで、「何を先にしたらええのやら、どうしたらええのやらわからん」といわれるので、課外体育委員会をつくって、そこが諮問をうけて検討することになったのです。

いま、同志社では田辺を整備しておられて、体育教育のためにもわたしは結構なことだと思っております。しかし、体育だけをもつて行っても駄目なんです。各学部ごとに体育デーを設けるとか、そういうことをやりましてね。他の授業の時間割と組み合わせ、午前は教室の授業に出て、午後は二時間ほど体育をやる。そこには各種目の先生がいて指導できる態勢をととのえておく、そういう具合にしないことにはね。ただ、それも学生の自由にやらせたのでは、どの種目に何人くるやらわからないから、曜日ごとに学部別かなにかの区分をしましてね。とにかく、体育のみを田辺でやるというのではなしに、他の授業との組合せで、さらに、体育に関しては施設と指導者のかみあわせを考える、そういうふうにしなないと駄目でしょうね。

——体育は午後がよろしいですか。

田淵 どちらでもいいですが、現在のよう

一講時に体育で汗を流して、二講時から教室に出るといのは具合がわるいでしょうね、特に夏などは。いまはシャワーの設備どころか着替えをする場所もないんですから。

いずれにしましても、田辺校地における体育施設や、その利用法などについては、いま大学で検討がすすめられているようですが、こうしたことも大学当局と教職員の皆さんが、スポーツと体育の必要性和重要性を理解していただいているあらわれだと思います。

体育教育・体育活動への期待

——田辺で先生の念願が実現しますとよろしいですが。

田淵 わたしの体育教育の理想は、一年生のとき集団でやるチーム・プレーを教える。そして二年生になったら各自が生涯やれそうな種目を選んで、基礎から練習をするということです。田辺は土地が広いから、それが可能でしょう。チーム・プレーをやらせるというのは、人間教育の上で必要なんです。体育会の連中だとOBがあり、監督、コーチがいて、そういう人たちとの接触とか合宿などで、人間関係も学ぶでしょう、単に技能だけ

を磨くのではないんですよ。体育会の在り方には問題もあるわけですが、そういう点もあるんです。同好会もよいと思いますがOBがないのです。体育の授業でも、集団の中の一員としてプレーをすることの大事さを、授業を通して体験してもらいたいですね。これは人間教育なんですよ。

それから二年生以上の種目は、その人が就職してのちも趣味としてやれる、あるいは市民スポーツと直結する、そうありがたいものだと思います。社会人になってからでは、なかなか基礎からはやれず、スポーツの楽しさを知らないで生涯を送ってしまうことになりがちですからね。同志社はゴルフなど他の大学より早く正課にとり入れてやりました。最初はOBから古いクラブをもらってきて練習に使ったりしたのです。ボールも毛糸でね、人に当ると怪我する恐れがあるということもあって。いろいろ工夫をしてやりましたが、ゴルフなど、卒業してから随分喜ばれました。

——校外コースなどもよろしいですね。

田淵 現在も学生が経験しておいた方がよい種目で、季節的場所にキャンパス内では出来ないもの、たとえばスキーなどいろいろ

やっておりますが、以前は白馬、槍、穂高、立山など日本アルプス系の山へ登るとか、女子学生の高原歩きなど、そういうこともやりましたが、新しい友達ができるだけでなしに、そういう機会でないとなかなか行けないし、卒業してからも時間があつたらちよつと行ってみようかということになります。以前、若王子墓地の早天祈禱会に出席した者に、体育実技の時間を与えてはどうかという話がありました、(笑)「山へ登るのだから、健康にもよい」というわけですね。(笑)

昔、相撲部が東京の大会で優勝したとき、翌日一講時の授業に先生が教室へ行ってみたら、相撲部の選手が一番前にずらっと並んでいたという話をききました。まだ新幹線のない時代です。夜行で帰ってきたわけですが、そういう心掛けはいまの学生たちにも欲しいと思っています。大学の体育は、ただ勝てばいい、強ければいいというだけのものではないのです。

同志社スポーツについては最近、オリンピック選手、全日本チャンピオンといった選手が続出して、はなばなしく活躍をしています

が、戦後の体育会、OBの活動などについては、岸田敏馬、北村光雄さんその他、歴代の体育会委員長などと語りあう機会をつくっていただきたいと思います。

——長時間ありがとうございました。今後ともお元気でお過ごし下さい。

(一九八二年十二月十七日田淵先生のご自宅で収録)



新島襄関係文献(抄)

LIFE AND LETTERS OF JOSEPH H. NESIMA

「同志社設立の始末・同志社大学設立の旨意―口語改記並原文―」

同志社大学出版部

森中章光編「新島先生書簡集」正・続

同志社

同志社編「新島襄書簡集」―岩波文庫

岩波書店

J・D・デイヴィス著・北垣宗治訳「新島襄の生涯」

小笠原学館

「新島先生記念集」

同志社校友会

「明治文学全集 第四六巻―新島・植村・清沢・綱島集―」

筑摩書房

J. D. DAVIS "JOSEPH HARDY NESIMA"

同志社

森中章光著「新島襄片鱗集」

丁字屋書店

森中章光著「新島先生と徳富蘇峰」

同志社

森中章光著「新島襄先生詳年譜」

同志社・同志社校友会

永澤嘉巳男編「新島八重子回想録」

同志社大学出版部

徳富蘇峰著「新島襄先生」

同志社大学出版部

魚木忠一著「新島襄―人と思想」

同志社大学出版部

岡本清一著「新島襄」

同志社大学出版部

渡辺実著「新島襄」

吉川弘文館

同志社社史史料編集所編

同志社

同志社百年史(通史編Ⅰ・Ⅱ)

同志社

同志社百年史(資料編Ⅰ・Ⅱ)

同志社

和田洋一著「新島襄」

日本基督教団出版局

雑誌「新島研究」

同志社新島研究会